# 『シビリアンの戦争』と『共和国による平和』

共同通信社発表用資料

三浦 瑠麗

# 本日お話しさせていただくこと

- 現代という時代認識
- 「シビリアンの戦争」の課題意識
- 「シビリアンの戦争」とはどのような現象か
- パックス・レプブリカ＝「共和国による平和」
- 日本にとっての意味合い

# 現代という時代認識

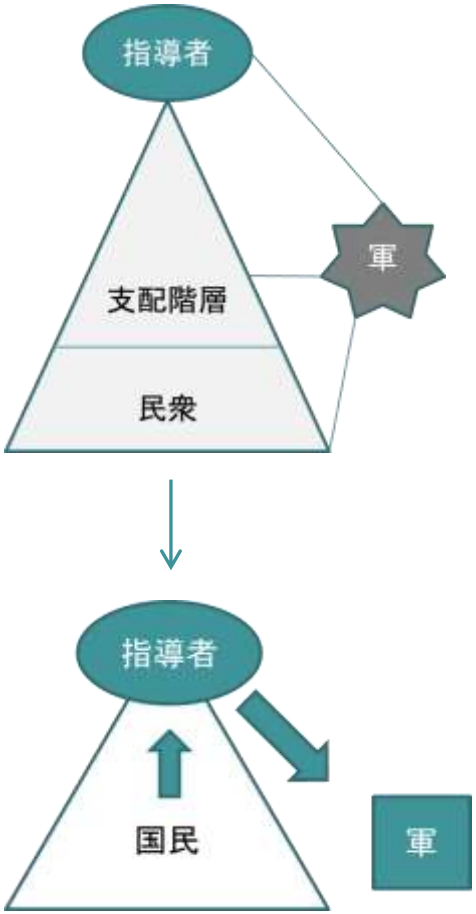
- **大戦争の時代の終わり**
  - 総動員の大戦争の終焉
  - キューバ危機の収束と核抑止の比較的安定
  - 米ソ和解と東側陣営の解体
- **冷戦のタガが外れて**
  - 限定戦争のエスカレーション可能性が減じる
  - 指導者の心理的抑制のタガが外れる
  - 開戦を後押しする世論の浮上と軍批判
  - 軍の組織防衛：戦いを渋る兵士（*reluctant soldier*）
- **現代のデモクラシーの戦争の本質**
  - 政府間の不信による不幸な戦争ではない＝外交の余地が少ない
  - 文民が主導し軍が反対する「シビリアンの戦争」が支配的に

# 「シビリアンの戦争」の課題意識

- **イラク戦争をめぐる素朴な違和感**
  - 数千人単位の戦死者 ⇔ 豊かで変わりのない日常
  - トミー・フランクス将軍とアカデミー賞パーティー
- **戦いを渋る兵士**
  - コリン・パウエルの反対（湾岸戦争）
  - 軍将校連を挙げての反対（イラク戦争）
  - 退役将軍による大々的な政権非難（イラク戦争）
- **民主主義は平和に繋がるのか**
  - 民主的平和論、先制（予防）攻撃論
  - 民主主義の自画像に反する戦争
  - 反功利主義的な世論、不平等な軍務負担

# 「シビリアンの戦争」という現象は時代を超えて存在してきた

- **4つの歴史的要素**
  - **民主化**
    指導者のオーディエンス（観衆）拡大
    定期的な選挙（支持/パニッシュメント）
    民意の下での責任所在の不明確化
  - **統治の安定性**
    指導者の抱える生命の安全等のリスク減少
    シビリアン・コントロール＝軍の従順さ
  - **国民の政治的動員（参加）度**
    指導者のオーディエンス拡大
  - **軍のプロフェッショナリズム**
    軍と階級利益との分化
    組織文化としての安全保障重視
    軍民の分断




➤すべてが拡大して初めて安定した民主主義＝「シビリアンの戦争」

# 英国のクリミア戦争は最初のシビリアンの戦争

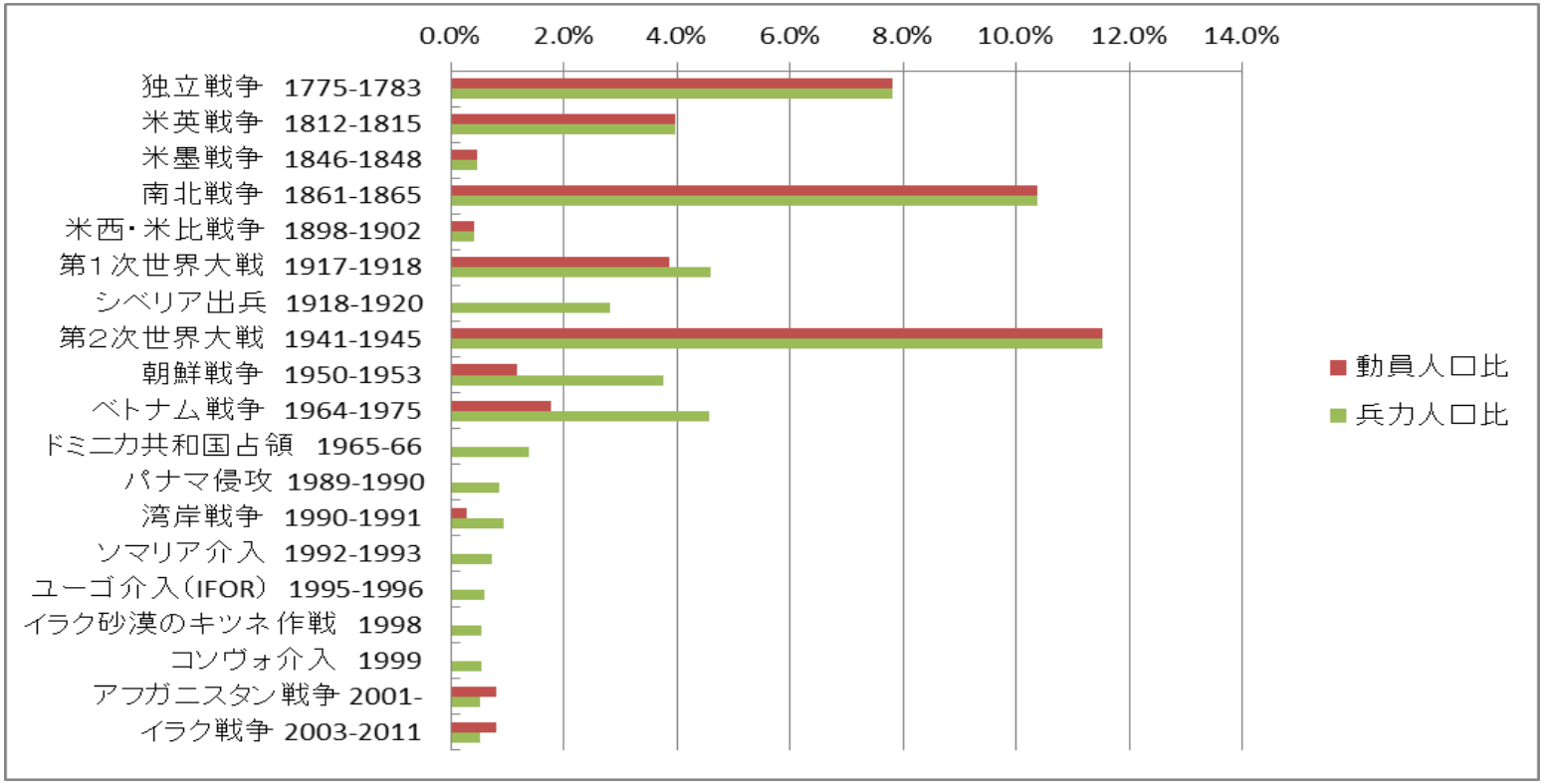
- 歴史的な自由主義勢力の再結集によるアバディーン連立政権
  - 特に積極的だったのはパーマストン内相（次期首相）
- 労働者階級の政治的動員
  - 民衆による首相や女王夫妻批判：愛国心の欠如
- 議会は参戦賛成派一色
  - ごく少数の反戦派、懐疑派も開戦後は批判手控える
- 正義の戦争
  - シノープの「虐殺」
  - 専政の「熊」ロシアと「乙女」トルコ
- 烈度は高いが動員度は低い
  - 兵卒は貧民、密猟者等犯罪者、強制徴発（誘拐）
  - 好戦的な労働者が戦争に行っているわけではない
- 実務的将校がプロの観点から反対する戦争
  - プロフェッショナリズムが高まりつつある改革期
  - 海軍をはじめ軍の開戦への消極性

＊昨今のウクライナ紛争対応への教訓

- 相手にも正義の動機があったら？―想像力の欠如
- 偽りのない権益 vs 正義を求める声
- ロシア恐怖症＝「悪魔化」と民衆革命の幻想

# イラク戦争はもっとも典型的な『シビリアンの戦争』

- 積極的な政権と攻撃的な世論の形成
- 軍の明確な反対、政策の必然性への疑問
- 総動員から最も遠いところでの無視しえない規模の戦争（下図参照）



# 「シビリアンの戦争」は民主主義と平和との間に存在する最大のディレンマ

- 民主主義の平和性の仮定
  - アカデミズムの世界ではすでに反証
  - しかし自画像自体は揺らいでいない
  - 専政の脅威に対する先制攻撃であるとの主張
- 民主的平和論
  - 民主主義の国家間での戦争の「不在」に着目
  - 冷戦期での同盟の性格など時代性も強いはず
  - イラン、中国、ロシアなどの民主化が定着した場合説得力が弱くなる可能性も
  - 国民感情の長期的な平和志向の醸成を通じて補完されるべき仮説にすぎない
- 軍を異質なものとして疎外する伝統
  - 軍人は全き市民としての権利は有さない：敵前逃亡・反論の禁止、軍事裁判
  - 羊飼い、羊、犬、狼（プラトンのアナロジー）の幻影がそれを支えている
  - 実質的な意味では弱者となりつつある（世襲される「二流市民」とニューカマー）

# 正しい戦争に対するテスト

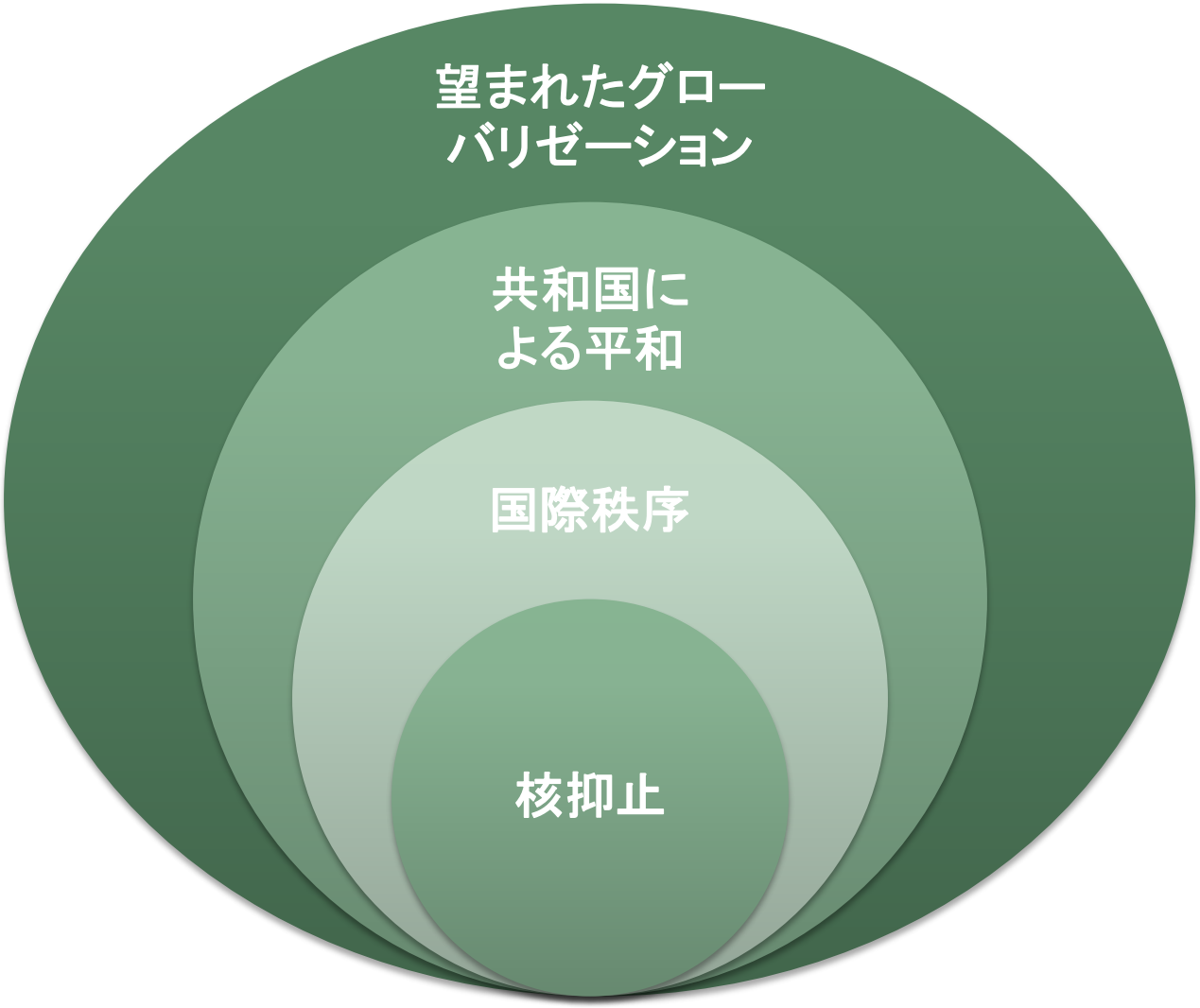
- 戦争の犠牲は正当化しうるか
  - 甚大な犠牲は事後的に戦争の正当性を疑わしくする
  - 大戦争のコストを中心に議論がなされてきた
- 戦争に訴えることは不正に照らして妥当か
  - 介入される側の同意がないがしろにされる以上不正と実力行使の均衡が必要
  - 釣り合う規模の報復の原則
- 戦争の動機に悪が潜んでいないか
  - 戦争に付随する悪意と邪な動機
- 戦争に国家が国民を送り出すことは正しいか
  - 共同体の防衛義務論／義勇軍の発想に影響された志願兵制の見方
  - 根の深い前提：若者の親たちとしての共同体の抑制性の仮定
- 戦争を決断する人はその犠牲を払っているか
  - 血のコスト、専門家に対する期待、国内的な正義よりも国際的な正義を優先

# 解はあるのか？
# ．．．パックス・レプブリカ = 共和国による平和

- なぜ共和国なのか
  - 血のコスト負担の共有（cf.　韓国政府高官のホンネ）
  - 経済的コストは常に隠される（スティグリッツらの試算）
  - プロの議論だけでは民主主義の将来に適さない
  - 国民国家が中心となった無政府状態の世界の現実
  - 世界政府ができたとしても問題の本質は変わらない
- 共和国のイメージ
  - 自由主義と豊かさの上に血のコスト負担の共有
  - 老壮も女性も召集される：予備役の拡充と戦時の召集
  - 15歳以上の健康な国民に災害対応想定の参加義務を伴う訓練実施
  - 国土管理と郷土防衛隊の予備役を持ち回りで無作為に充てる
  - 轟々とわき起こる国民的議論そのものが血のコスト負担の不均衡を自覚させる
- 共和国にはどのような問題があるのか
  - 軍事的経済的不合理
  - ナショナリズムの強化
  - マスキュリンなものの見方の強化

●イラク戦争の経済コストは2008年時点の試算で、3兆ドルに上るとの指摘
Joseph Stiglitz & Linda Bilmes,
・“No US peace dividend after Afghanistan,” *The Financial Times,* January 23, 2013.
・ “The $3 Trillion War. “*Vanity Fair*, April 2008.
・*The Three Trillion Dollar War*. W. W. Norton & Company, 2008.

# 平和を達成するための段階論



# 日本にとっての意味合い

- GOの世界　⇔　同盟に頼った安全保障政策
  左右双方の象徴性の亡霊を巡る争い
- プロの影響力の低下
  - 世界各地での民主化の進展と指導者の大衆化
  - 冷戦の終結は安全保障の領域の神聖さを低める
- 自衛隊を道具としてみる人々
  - 原発、災害、平和維持活動、etc.
  - 自衛隊積極肯定派もリベラルもともにその側に立ってはいない
- 東アジア各国との偏った貿易経済構造
  - 日本企業の進出は後押し
  - 外国企業の進出はむしろ脅威と見る見方
  - 日韓・日中の紛争に関して両国との貿易関係は示唆的
  - 踏み込んだ意識調査/エンゲージメントが必要ではないか

# G0の世界とプロの影響力の低下

- G0の世界とは
  - 明確な指導者の不在と複数陣営の併存
  - 普遍的理念と功利主義、地政学の論理の併存、偽善主義の拡大
  - 国民国家中心主義（中露）vs　国際秩序重視（欧）/グローバルな覇権(米)
  - 否応なしにグローバル経済が統合を始めアジア経済が成長する
  - プロの影響力が低下し民主主義と民意が役割を増す
- 米国の民意に基づく日米同盟の変質の兆し
  - 帝国からの撤退（cf.シナリオ20XX年）
- 安倍政権の外交安保政策の特徴
  - 国民国家中心観　vs　グローバルな世界の捉え方　の間で揺れ動く
  - 安倍政権の戦っている敵＝日米安保否定派/強大化する中国
  - 積極的平和主義とグローバル化に関して本気度は不明
  - 出自は国民国家中心観でも結果的に日米同盟に対する楽観/期待が持続
  - 日本の生きるスペースを創出するために積極的に背骨を入れるべし

➢グローバルな民意（プロ/民双方）の心を掴まえる必要

# 日本の平和のためにできること

国民意識レベルでの同盟の強化

民主主義とプロ意識とのバランス感

正しい戦争=犠牲に対するテスト

アジアに対する真の門戸開放・・・日本で儲けてもらう